

この本と私

読むだけで、気分がハイ!
書くだけで、判る!ことがある

「心の一冊 日本エッセイスト・クラブ編」

この本は、各界で活躍する35人が、忘れられない一冊の本について語っているエッセイ集です。印象に残ったのを2編。作家の畑正憲氏は旅に次ぐ旅の取材の傍ら、現地でなければ手に入らない本を読むのが常とのこと。仕事柄、ライオンのエルザを育てたジョイ・アダムソンやゴリラと暮らしたダイアン・フォッシーの本を読みあさり、ダイアンさんにはルワンダまで会いに行き、彼女の足跡を訪ねるほどの熱の入れよう。心の一冊は、競走馬について書かれた「シービスケット」。疲れ切った老馬と調教師、馬主、騎手の一途さと変人ぶりが、ノンフィクションならではのおもしろさがあると語ります。畑さん自身、草競馬の騎手であり、旅の先々で即興のマッチレースを今でも楽しんでるそうです。

元読売新聞編集委員の深尾凱子氏は「言志四録」の著者、佐藤一斎を先祖に持つそうです。「言志四録」は、処世、教育、心身の健康など人生一般の諸問題に触れた助言集。深尾さんが処世訓から実践していることは、いつも笑顔を絶やさないこと、何事も自分が感動してこそ人を感動させる事ができるということ、講演は分かりやすく伝えること。西郷隆盛や吉田松陰が愛読し、明治維新の志士にも影響を与えた「言志四録」。しかしながら、深尾さんが先祖の名著に関心を持ったのは退職してからということです。小泉首相が外務官僚と確執を続ける田中真紀子外相に、参考とするよう勧めたことがきっかけだったそうです。

文藝春秋

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞